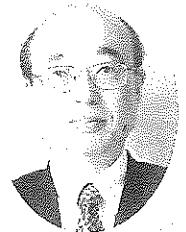


鈴木 朝英 先生揮毫

事務局 札幌市西区西野
7条2丁目1-2
齋藤 彰 方
TEL 090-3773-8824

発行責任者
会長 竹田 正直
北大教育学部同窓会

この一年の活動報告



教育学研究科長・教育学部長

鈴木 敏 正

これまでの三大講座・三協力講座・一センター体制の整備充実に取り組んでいたという事は昨年報告いたしました。○七年度に向けて、教育学研究科全体を教育学院・教育研究院に改組することに取り組みました。高等教育とくに大学院の高度化・多様化への新たな要請と研究・教育の二一世紀的發展課題に対応しようとするものです。この改組は認められまして、来年度からは、研究組織（教育研究院）は人間発達科学と教育社会発展論の二分野プラス子ども発達臨床研究センターに、教育組織（教育学院）は健康スポーツ教育論・発達教育臨床論・学校システム開発論・教育社会計画論・国際多元文化教育論の五講座になります。昨年、改革の目玉として

いた乳幼児発達臨床センターの改組拡充の概算要求は実現しませんでした。しかし、その経験をふまえて○六年度から新たに、乳幼児から青年まで、とくに困難をかかえた子ども全体を対象をひろげた、教育学科研究科付属「子ども発達臨床研究センター」に改組し、現在のところ、その事業を進めるための概算要求が文部科学省段階で認められるというところまでこぎつけました。この新センターは、教育学部・教育学研究科の「目となり耳となつて」、私たちの教育・研究・社会貢献活動を発展させる核となり、地域社会あるいは社会全体との媒介となることが期待されています。

もちろん、現在実際に取り組んでいる研究・教育・社会貢献活動も活発化して

いて、どの教員も忙しげに躍っております。

研究活動においては、それぞれが教育学の幅広さを活かした多様な研究を推進すると同時に、科研費によつて研究科全体で取り組む総合研究「発達・学習支援ネットワークのデザインに関する総合的研究」（通称「ネットワーク科研」）を推進しています。その成果として『発達・学習支援ネットワーク研究』という研究報告書（現在すでに、

創刊号から第六号まで、以下、続刊）を發刊しました。今年度はとくに（一）ニートやフリーターなどによつて社会問題となっている若者に焦点化した青年プロジェクトと、（二）困難をかかえる子どもの発達・学習支援に焦点化した特別支援プロジェクトの二つに絞つて実践的・実験的な調査研究を進めました。

教育活動においては、共通教育・教職課程も含めた、学部から大学院のキャリアラムの全体的見直しをして、新たな時代に対応した再編成が必要となっています。とくに、重点化された大学院では、高度かつ多様な専門的職業人の養成という課題にどう取り組むかが問われています。これらについては、大学院カリキュラムについて大幅改正を行いました。したが、教育学院への改組はこれを土台にしたもので

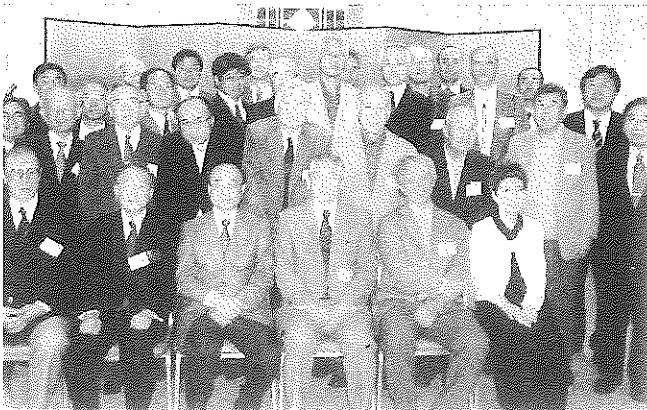
教員養成・再教育に関しては、専修免許取得にかか

同窓会総会案内（毎年10月第三木曜固定）

- 一、平成18年10月19日（木）
 - 一、午後6時より約2時間
 - 一、札幌市中央区北8条西4丁目
札幌アスペンホテル2F
TEL 7000-2111
- 札幌駅地下北口の「北大方向」の看板から地上に出ると前の10階建
年会費未納の方は年会費2000円を同時に納入下さい。

今回から、会に先立ちミニセミナーを開催します。

第一回は、逸見 勝亮（へんみ まさあき）先生、北海道大学理事・副学長。テーマ「札幌農学校と佐藤昌介」です。多くの皆様の参加をお待ちしております。



北海道大学教育学部同窓会

わるカリキュラムをより開放的で実践性のあるものとするとともに、スクール・リーダーやカリキュラム・リーダーを養成する実験的プロジェクトに取り組んでいます。また、特別支援教育に加えて、健康スポーツ科学講座や多元文化教育論協力講座があることのメリットを生かすこと、さらに、生涯学習・社会教育関係の職員・ボランティアリーダー養成、大学職員養成などについても模索し、関連するプロジェクトを進めました。

社会貢献活動については、「地域連携委員会」を設けて検討しています。北大全体で進めている「包括連携」は大企業との連携が多いのですが、教育学研究科としては、中小企業を中心とした地域企業、とくに自治体や公共的な教育関係団体、地域教育実践諸組織などのパートナーシップをつくっていく必要があるのではないかと考えておりますので、同窓会のみなさんにはご意見・ご提案をいただきましたら幸甚でございます。

なお、国際交流の活動においては、アルスター大学

との一〇年間におよぶ姉妹校の関係が終了する一方、「ネットワーク科研」で交流と比較研究を進めている同じイギリスのリーズ大学との交流を深めています。また、北大とソウル大学による日韓シンポジウムに取り組んでいますが、ソウル大学に限らず韓国教育学会との連携を進めることとして、とくに公州大学はより積極的に、継続的な交流の申し込みがあったので、これに応えるような交流を推進しています。

最後に、教員の異動について報告します。長年勤務されてきた健康・スポーツ科学講座の須田力、森谷繁両先生が、本年四月一日をもって退職されました。両先生はとくに学生や地域住民にねぎした研究と教育で大きな業績をあげてこられ、退職の際にはわれわれを叱咤激励するくらいのお元気でしたが、制度上やむをえないことでした。両先生とも北海道大学名誉教授となられ、今後とも札幌に在住されて、それぞれあたらしい世界で活躍なさっております。



北大教育学部同窓会会長 竹田正直

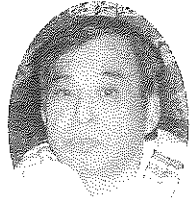
入れ替わって、同講座には水野真佐夫(体力科学担当)、大塚吉則(健康科学担当)の両教授が就任されました。また、同じ時期に、教育福祉論担当として岩田美香助教が赴任され、一〇月からは、日本教育史担当として近藤健一郎助教が来られる予定です。新しい力、若い力を得て教育学部・教育学研究科も活気づいています。

昨年(二〇〇五年)一月より、北大教育学部同窓会長に選任され、本年二月に刊行されました『同窓会会員名簿・平成一七年度版』に就任のご挨拶を書きました。そのさい、第一に、多米豊会長、小島忍幹事長など前役員の方々による永年にわたる同窓会発展へのご尽力にたいする心からの謝意、第二に、同窓会の目的の「会員の親睦と研鑽」の実を深め、多様な卒業期の同窓生の参加への期待、三に、母校、北大教育学

部の大学院重点化、独立法人化の発展などについて述べました。今日、人類は、新しい時代へと移行しつつあります。社会から「知識教養社会」への過渡期です。知識・情報化社会という学者や知識基盤社会という行政関係者もいます。知識や教養、情報が社会や経済の主要な財力となつてゆき、ますます、平和、共生、健康、環境、福祉が重要になり、これらを伝達してゆく教育(共育)活動がいつそう重視される社会です。教育(共育)活動の科学的研究と普及・後継者養成と社会貢献を使命とする教育学研究科・教育学部の役割と社会的重要性は、「知識教養社会」では格段に高まります。知識や教養、情報が社会経済や文化の主要な財となる社会では、「人間の絆」がそれをうみだす基礎となり、重要な社会的な宝となります。その点で、同窓会の活動も大きな新たな社会的意義を持ちはじめきています。私立大学では以前から重視していた同窓会の役割を、独立法人化した国立大学が、全国的に、

うやく注目しはじめております。今年一〇月二三日(月)午後六時、札幌音楽堂キトラで、北大農学部林学実科を一九三五(昭和一〇)年に卒業し、本年二月八日に九一歳で逝去した大作曲家、元東京音楽大学学長伊福部昭を偲ぶ「伊福部昭の世界」コンサート(ヴァイオリン三原豊彦、ピアノ土肥睦子、室内楽川越守指揮各氏ほか)を、私が事務局長で企画しています。中村睦男北大総長、逸見勝亮理事・副学長、諏訪正明農学院長・農学部長ら現役の方々とともに、廣瀬量平氏、谷本一之氏、高村泰雄氏、山田定市氏、三浦英典氏、鈴木泰氏など沢山の教育学部同窓会関係者が、これに協力してくれています。個人的にも「同窓会の絆」が、とても大切なものであることを実感いたしました。伊福部昭氏は、若き時代にパリの国際作曲コンクールで優勝しロシア人作曲家の「チェレブニン賞」を獲得し、私が北大定年後に勤務している北海学園大学とも関係の深い方です。

本年一〇月一九日(毎年、第三木曜日)の教育学部同窓会総会及び懇親会に、ぜひ、多数の方々がご出席くださり、世代をこえた新しい絆を創りだすことにご協力ください。



一九期 産業教育ゼミ 鈴木泰 (すすき眼科 院長)

教育学部を卒業したのが札幌オリピックの前年、一九七一年だから今年の三月で教育学士の卒業証書をいただいで満三五年になりました。いったん北海道を離れて、再び舞い戻ってきたのが一九七六年、それからも三〇年そして医師免許証をもらってから二三年、ここ恵庭で開業して満一四年。平成元年に千歳市立総合病院の初代眼科医長として赴任、三年間地域の眼科医療に貢献したという自負があったが、医局の先輩が一年ほど先に千歳で開業したという事情もあって平成四年四月恵庭で眼科医院を開

業した。当時の国道三六号線沿で札幌寄りの外れの広大な空き地だらけの中にポツンと八〇坪の土地を確保したものの、これでは患者さんの駐車スペースがないということと周囲の空地の所有者二〇人余りに譲渡をお願いしたが、「よそ者が」という感じで（バブル末期という事情もあったか）八〇坪以上は確保できなかった。これでは駐車スペースが確保できないのでやむなく、一階部分を駐車スペースにするピロティ方式の建物にした。そのため三階建となり、六五〇〇万円の建築費のうち一五〇〇万円がエレベーター設置のための費用ということになった。それから一四年、恵庭の地域医療のために頑張った。今では診療所でも自宅でも向こう三軒両隣とみんな仲良くしている。それ以上に地域のために自分ができることは一生懸命やらせてもらった。

四年前から恵庭市でコミュニティFM放送局をつくるために活動しているグループ（えにわFMラジオ局設立準備会）を応援していたが、五年目を迎えても開局の見込みが立たないと

いうことで解散の瀬戸際に立とうとしていた。平成一七年三月のことである。準備会代表者Kさんから相談を受けた商工会議所会頭が話を私に持ってきた。「あなたが頭になってすすめてくれないか」と。一〇年程前に恵庭に都市型ホテルを建設しようとして失敗した前例（？）があり、周囲は否定的な意見が多かった。どここの街でも活性化・コミュニティの再生などと言

い古されているが、恵庭市内にも三百余りの市民団体があるにもかかわらず横の連携はない。要はこれをコミュニティFMでなんとかできないかということだ。妻は半分あきらめ顔でポツリと言った。「好きなようにしたら、泣き言はいわないで」。一週間ほどで結論を出した「やらせていただきます」、しかしその時点で全く成算はなかった。にわか仕込みの勉強が始まった、そもそも放送業界のことは全く分からないし、どのような形態でどのような事業化をすすめたらよいか、分からないことばかりであった。にもかかわらず八月四日には「えにわコミュニティラジオ局開設準備会」なる組織を設立し、市内企業の代表者ら二〇名参加のもとに第一回会合が開催され、新聞地方版に大きく報道された。もう後には引けない。コミュニティ放送局開局に向けて市役所職員である準備会K代表と私の二人三脚の困難な旅が始まった。準備会の二回目以降の会合には招集をかけたも数人の出席しかない有様で、資本金四千万円、二月二十五日クリスマス開局の構想はまさに「風前の灯火」で九月末を迎えようとしていた。このままでは展望が開けないと判断し、とにかく専従事務局を置き、開局は来年以降に延期することにした。産業教育ゼミの一年先輩で北海道セキスイハイム取締役だった原田功雄さんが、病み上がりではあったもののフリーでいたので事務局を引き受けていただくことになった。

このあたりから上昇気流にかわり始めた。また毎週木曜日の休診日にはKさんと二人で市内の企業巡りを続け、一〇月末には準備会総勢二〇名の総力を挙げてプレゼンテーションを行い、約四〇名の賛同者の参加を得た。

道補助金申請の関係で、三月三日までに最低一〇〇〇万円の資本金（放送をできるための最低限の資金がないと総務省で放送免許申請を受理してくれない）で会社設立しなければということ、Kさんと二人で資本金を用立ててとにかく資本金一〇〇〇万円の「えにわコミュニティ放送株式会社」が設立・登記された。これと平行したスタッフ募集を行い、原田放送局長以下、フルタイム二名、パートタイム五名という陣容が決まり、一二月から本放送に向けての研修がはじまった。一月には放送局の愛称は恵庭特産のえびすカボチャにちなみ「FMパンプキン」また、開局日は三月三日の桃の節句と決まった。勿論、開局日はあくまで当方の予定で総務省が免許しない限り電波は発射できない。ちなみに道内でもっとも新しい札幌南区のコミュニティFM（グリーンエフエム）は開局一時間前に免許がおりたという話だ。さ

四〇四室から(一六)



66年卒 教育史・比較教育 逸見 勝亮

◇同窓生のみなさんにはお変わりなきことと存じます。僕は、昨年五月から理事・副学長となり、生活は激変してしまいました。評価・広報担当理事で、図書館長・大学文書館長も兼ねています。毎日七時半から八時には出勤するのは、従来通りなのですが、八時半ないし九時からは打合せ、相談、会議、マスコミへの対応などで、濃密な時間が、それもあつという間に過ぎていくのです。四〇四室に居るのは月に一日もあるか



どうかです。学生は本部事務局には来たがらず、一年生にとって僕はもう「見知らぬ人」です。そんななかで、まあ何とかやっているといるところですよ。

◇写真は今年の雪祭り「市民の広場」に学部四年生たちが製作した僕の雪像です。◇構内と旅先で見かけた鳥は、スズメ、ハシブトガラス、ハシブトガラス、ドバト、キジバト、キセキレイ、ミヤマカケス、ニホンキジ、コゲラ、アカゲラ、エゾアカゲラ、ダイサギ、コサギ、ゴイサギ、アオサギ、ミソサザイ、カワガラス、ヒヨドリ、ムクドリ、カワラヒワ、キビタキ、シロハラゴジュウカラ、シジュウカラ、ハシブトガラ、ヤマガラ、マガモ、カルガモ、オオハクチョウ。例によって珍しい鳥に出会ったわけではありませんが、雛六羽を連れ警戒心をなげらせたカルガモの母親の眼光、オンコの種類を割って食べるヤマガラ必死の「鳥相」は印象的でした。アオサギの排泄、それも飛翔中の排泄を見たのは初めてです。函館本線砂川辺りで列車から見たオオハクチョウ数百羽が点在する光景は見応えのあるものでした。「カラスの行水」と言いますが、カラスの水

浴びはスズメ、シジュウカラなどよりはよほど入念で、見ていて飽きないものです。◇研究の速度は落ちましたが、「戦没者寡婦教員養成所の歴史」「敗戦直後の日本における浮浪児・戦争孤児の歴史」を続けています。NHK放送博物館に通って、同館所蔵のNHK連続放送劇「鐘の鳴る丘」(菊田一夫作)の放送台本七九〇回分を読みました。まとまった時間を割くのは難しく、三年越しの仕事となりました。メデアが取り上げた浮浪児・戦争孤児像を整理しようとして、思いがけぬ時間がかかってしまいました。目下、教育学部会で「ラジオ・ドラマ『鐘の鳴る丘』考——浮浪児・戦争孤児へのまなごし」と題して発表する原稿を書いています。そう、紙芝居版「鐘の鳴る丘」を探案中です!

◇昨年会ったことを失念して書き漏らしたのは、三回もでつくわした美馬朋子さん。森谷・須田両先生の退職記念行事の際に、笠井剛・宮田博己・田村圭子・鈴木健一・辻英之・辻典子・中島英治・中野敦之・松田めぐみ・中馬美葉子・渡邊成江・中瀬裕子・野田静香・佐藤晃・八村宏・藤喜一郎・須藤直・能登

恵・田村妙子・村岡幸子・三木裕紀子・小浦克文・曾和浩・島山明子・穂本秀樹・山崎景子さんら多くの卒業生に会いました。北大同窓会関西エール会の折りに、佐藤彰・堀内妙子・浅田正典・浅田初美・中川文子・広田弘子・有田文茂・岡和孝さんと会いました。僕が挨拶やら後援やらで出向いたのです。普段に卒業生にでつくわす機会は今や稀となりました。青山新吾・新井直子・中村瑞穂・奥澤紗綾香・山田敏之・石山智浩・高橋加那子・鈴木健一・辻英之さんは本部事務局の理事室まで来てくれました。金石陽子さんとは学部で、高瀬美菜さんとは大阪で、斉藤なおこ・榊原宏通さんとは東京で、清水瑠美・山本房子さんとはデパートや地下街で、加藤伊都子さん一家とは北五条通りで、斐英恵さん一家とは学内中央食堂で、ぱったりだったりで、連絡をとって

だつたりで、会いました。松村香奈さんとは学部と広報関係の会合で、一本(いちき・はじめ)さんとは大

さんとは学内でときどき。水産学部にいるはずの上田敦さんとは大学祭の早朝に農学部前で、武藤拓也さんとはNHK放送博物館で、いずれも予期せぬ出会い。「輔子・原敬のことども——初代総長佐藤昌介断想」(博物館土曜市民セミナー)を聴きに来てくれました。小川正人・白取道博さんともときどき。皆川義隆さんのカナダにいるはずの娘・はるなさんと道庁広

場で会ったときは驚きました。たまたに理事室に現れる青木仁子さんの姪・久美子さんは水産学部二年生になりました。ますます仁子さんに似てきました。八月に来札した甥の真人さんは高二で長井高校弓道部主将、一七九センチの美丈夫です。◇僕の在職期間は、二〇〇七年四月末までです。とは記してみたものの、今のところその日暮らして、先のこと考えることはできません。とは記してみたものの、最後の「四〇四室から」となりますので、ひとこと申し添えます。以下は、最近教育史学会HPに代表理事として載せた挨拶です。学生との交流抜きに研究者としての僕と僕の仕事はあり得なかつたので、挨拶代

わりに再掲します。人々の「営為の継承」と涉り合う。人の営為には少なからず営為そのものの継承が含まれている。「営為の継承」とはすなわち広い意味での教育であり、しかもそれは「営為の歴史」抜きにはあり得ぬ。だから、人は意識するとしな

いとを問わず、歴史的に、しかも常に教育的に振る舞っている、というのは誇張ではない。このことは、無数に存在する教育の事象から、教育史学の対象を選び取る困難を示唆している。その故に、教育史学は絶えざる対象拡大の過程をたどるのである。このよう

てきたかを考える学問なんだ」と感想を述べた。僕にとつて模索を解きほぐす鍵である。

そのうちそうもいかなくなってしまいました。僕は四〇歳までは朝から晩まで学生と一緒にいました。ゼミの議論が何とも行き詰まってしまう、黒澤明「生きる」をゼミのみんなで見に行つて、モノクロの世界を堪能したこともありました。生協食堂で一人で食事しているのを見て、「友達いないのか」と心配してくれたのは渡辺崇さんです。里芋の煮物が食べたいという学生に、僕は早速里芋・鶏肉の弁当を差し入れました。Aの卒業単位が足りないと、僕があちこち頼み込み、幾人かでレポートを代筆して一〇単位以上かき集めたこともありました。文

学部の先生にレポートで頼んでどやされました。事前に卒論発表会の質疑を打ち合わせて、大抵うまくいきましたね。相澤里奈さんが卒業式の壇上で抱きついたあの光景は、今でも語り草です。増淵俊文さんの結婚式で、竹下忠彦さんの息子・迪太郎君と、山ノ上ホテルの階段を幾度上り下りしたことか。書き出せばキ

リがありませんが、最後にひとつ。今年六月のある日の四〇四室で：学生「先生、大学院入試で面接担当しますか?」、僕「うーん、どうして? 面接にいたら怖い?」、学生「怖いです。」、僕「面接のときに、僕の顔を見ただけで、泣き出したのがいたよ。」

四〇四室・学部長室・理事室まで訪ねてくれた、構内・札幌駅前通り・映画館・国会図書館・浜松町駅ホーム・飛行機内ではつたり出会った、メールをくれた、年賀状をくれた、そして会う機会がなかった卒業生の皆さん、ときどき古い順番から思い返しています。さらば四〇四室!

☆——☆——
教育学部で何を学んだか



57年卒 生活教育(教育社会学) 鎌田とし子

一九五七年に教育学部を卒業して、五〇年近く経つた。このうち文学部社会学科に在籍していた二年を除くと四六年間教壇に立っていた勘定になる。今年五月

念願の、「終の棲家」を宮の森に建て、ようやく札幌に帰ってきた。その間、北海道立保育専門学院に九年、東京女子大学に三〇年、関東学院大学大学院に三年勤務し、二度の定年退職をしたのち現在も福祉専門学校校長を五年続けている。

この間、講義担当科目は労働社会学、家族社会学、社会福祉学へと変わっていった。理由は学生の卒論のテーマが徐々に変化していったからで、さすがに福祉の担当は初めてのことだったので、途中一年間は福祉の本場スウェーデン・ストックホルム大学へ赴き、スウェーデン社会研究所の客員研究員として学んできた。しかし今日まで、途中で講義科目が変わって困ることはなかった。北大教育学部で社会科学の基礎をしっかりと身につけていたからである。

当時の北大教育学部は、戦前「教育科学運動」に参加したかどで獄舎に繋がれたが、決して節を曲げなかった立派な教授陣で構成されていた。暇を持って余して床板の隙間にずらつと並んで刺さっていたシラミの数を数えた留岡清男教授の話とか、やぶにらみで白髪

まじりの頭を振り回して教育のあるべき姿を熱く語られた城戸幡太郎教授など、日本の教育史上に輝く宝物のような先生たちに教わったのであった。指導教授であった籠山京先生のゼミでは理想主義者ロバート・オーエンを読んだし、授業では「猿が人間になるにあつたの労働の役割」が実演つきで語られたりした。だから教室で教える技術というよりも、天下国家について、人間の本质について、深く哲学せざるを得なくなるような授業ばかりであつた。その雄大さと理想主義的雑学はいまの大学ではお目に掛かれないかもしれな

い。当時の学生はといえば、敗戦で士官学校中退や除隊してきた者、小学校の教員、私のような子連れ学生など通常のコースからはみ出した学生が混ざつていたので、議論をすればとどまるところを知らずといった賑やかさであつた。年令も経歴も生活環境も価値観も多種多様な学生集団は、自由な発想と研究に対する好奇心を育ててくれたように思う。

ごく最近日本社会学会のメンバーが組んだ科学研究費によるテーマ、「研究者は社会学をどのよう

にまた教えてきたか」について、主要な研究者からの聞き取り調査が実施された。私もその一人として聴取を受けた。女子大学にも関わらず研究者になつた者が多いからということであつた。答えながら気付いたことは、学習に際して問題意識を持つか持たないかがキイになつていてことであつた。教育のかなめは学生に問題意識を持たせることになつたのではないか、そこに行き着いたのであつた。

問題意識は現実の生活体験の中から生れるものの方が確かであり強烈である。しかし人生経験の少ない現役の学生は知識の断片は多く持ち合わせているけれども、何が問題なのか分からない。周囲にはこれだけ沢山の社会問題がうち寄せられているのに気が付かないでいる。教師はそれを気づかせるところから授業を始めるべきではないだろうか。そのためにゼミがあり合宿があり飲み会がある。いま何が問題なのか。これを徹底的に考えさせる。この労力を惜しみ手を抜いたら、いかに多くの本を読ませても実らない。

ただし研究の課題にするには、芽生えたままの感情だけではなく洗練され研ぎ

澄まされた方法論を併せていなければならない。それを教えてくれたのが教育学部の教育であつた。私はここで得た方法を駆使して、日本社会の構造を四〇年にわたつて調査し『社会階層と現代家族―重化学工業都市における労働者階級の状態―(お茶の水書房)』にまとめた。これは日本研究の書の一つとしてケンブリッジ図書館に納められていると仲間から聞いた。同じく『日鋼室蘭争議三〇年後の証言―状態二』同、貧困と家族崩壊』ミネルヴァも上梓した。どれを取つても貫く問題意識と方法論は教育学部時代にたたき込まれたものである。狭い教育技術ではなく、全体社会の構造を背景に、生起する諸事象を位置づけ分析する広い視野と、空論ではなく現実社会から逐一裏付けをとる実証主義、これらは教育学部で学んだ教育の核心部分であつた、といま思う。

問題意識と方法論と、これが獲得できれば時代が変わりどのように社会が変化しても対応できる。いまの大学は、二単位制になり教員の担当科目数が増えて大変だと聞く。また時代の流れが速く見通しがつきにく

い。学生は入れ替わり立ち替わりやってくる。かれらの卒業テーマにつき合うのは容易ではないが、うまくいけば社会改革の原動力になり、研究を引き継いでくれる人材が育ってくれるに違いない。教育学部の教育は、学生時代には一見雑学に見えたけれども、長く命脈を保つのはやはり幅の広い「雑学」のお陰ではなかったかと、人生の終着点に辿り着いたいま考えている。
 (東京女子大学名誉教授)

- 一九六八年四月 東京女子大学文理学部社会学科専任講師・助教教授・教授となる
- 一九九〇年三月 スウェーデン・ストックホルム大学客員研究員(一年)
- 一九二〇年三月 東京女子大学大学院・文学研究科修士課程教授
- 一九九七年三月 東京女子大学定年退職
- 一九九七年四月 関東学院大学大学院・文学研究科博士課程教授、のち定年退職
- 二〇〇〇年四月 西田学園アルファ福祉専門学校校長、今日に至る
- 一九二九年二月二〇日 東京都麹町で生まれる
- 一九四六年三月 疎開先の滋賀県淡海高等学校卒業
- 結核、出産、離婚を経験
- 一九五三年四月 天使女子短期大学に入学し、栄養士、生活改良普及員資格取得
- 一九五五年四月 北海道大学教育学部(生活教育)入学
- 一九五七年四月 北海道大学文学部(社会学)学士入学
- 一九五九年四月 北海道立保育専門学院に専任講師として就職

の工具、そのうち学校全体が軍服縫製工場に変えられ、授業料は払っているのに何も教えてもらえないまま四年間で卒業させられました。卒業しても良家の子女は働くものではないという因習と、折から復員兵と引揚者が大量に失業している中で一年間しか勉強していない女性が職に就けるはずもありませんでした。

結婚適齢期の男性が戦死している時代ですから、親の薦める生き残り結婚し子供も二人生れたものの嫁しゅうと問題に翻弄され、当時は食糧難で親族そろって故郷に帰り農業生産をした時代だったので慣れない農作業と、大家族でひどい目に遭いました。蛭や蛇の泳ぐ田圃に入って農作業をしたり、肥たごを担いだり、さんざんな経験をしたのですが、周りにはもつとひどい経験をしているお嫁さんたちが一杯いたのです。産後二日目から農作業に出され子宮脱になった隣のお嫁さんは、働けない体になつたからと離婚され、生まれつきの病を患ったお嫁さんたちが、次々に燃えましたが、そうした例はたくさんありましたし、私自身も助けたい状況にあるので、「これじゃ駄目だ、勉強し直していか助けに来るんだ」と、固い決心をしました。これが私の女性史の原点です。

それから父を頼って札幌に出てきて、再出発します。ラジオの通信教育講座を毎日聴いて勉強しました。二人の子供を外に出すと危険なので閉じこめると、近所の子供を呼び込みますので、さながら保育園の喧噪の中で勉強するわけです。新制高校の検定試験を受けないと進学できないので、先ずこれを通して短期大学に入りました。勉強を始める時砂漠に水が吸い込まれるような勢いで知識欲が止まらなくなり、北大に入り直します。在学中の生活は夜間高校や各種学校の非常勤講師をして稼ぎまわりましたので、何時も胃を悪くしていました。

はじめは職業に結びつく資格が取れるなら何でもよかったのですが、栄養学実験をやっていると北大医学部教授から帯広畜産大学の講師のくちが来たり、道庁の生活改良普及員の親玉からアメリカ留学に誘われたりしましたが、次第に視野が広がるとと研究をしたいという気持ちが、

た時「とうとうやっつたね。あのくらい（暗唾するよう）な）鼻つばしの強い奴でないと、駄目なんだなあ」と笑っておられましたけど、私は失礼な学生だったので

そうした環境の中でやがて私の関心は、資本主義社会の構造と階層の究明へと向かいます。社会を全体として捉える方法は社会学だ

ろうと見当を付けたのです。まわりを見ると文学部にはかの著名な鈴木栄太郎先生がおられるではないか、というわけでその門下に入りました。鈴木先生の授業も開口一番「問題意識を持たないと、どんな知識も身に付かない」と、目標があるとそこに辿り着く道順がすべて頭に記憶される、漫然と歩くなどというたとえを示されました。ただ先生は喘息持ちで授業中せいぜいと息が苦しく、絞り出すようなお声を聞くとお気の毒でいられませんでした、それだけに一言も聞き漏らすまいと真剣そのものでした。卒論の指導を受けにご自宅にも再々伺いましたが、先生の学問に対する真摯な姿勢に打たれ、卒業後も折々にお訪ねしてご指導を仰ぐことも多かったです。学生の時でしたが、ゼミ

の発表の折りに鈴木理論を批判して生態学的だ、階級的視点が無いなどとぬけぬけと批判したときもここにこ笑っておられました。全く失礼な学生でした。そんなわけで結局は自分で資本論をベースにしながら勝手気ままに乱読して二重構造飯説に辿り着いたわけですが、自由な雰囲気の中かで勝手に走らせておく度量を持つていてくださったことは有り難かったです。

た。ここを探して下さったのは鈴木先生が去られたあと卒論の指導教授になつて下さった関清秀先生でした。ここに就職して有り難かつたのは、北大卒が来てくれたというので大事にしてくれました。授業は三科目（社会学、教育学、栄養学）担当で、舎監を勤めてくれたらあとの時間は自由にしてよいということでしたので、関先生の大学院ゼミに五年間出席し調査にも参加しました。専門学校だ

というので気を緩めないよう自らに課したのは、一年に一回は学会で報告をする、「社会学評論」に論文を提出するということ、これは忠実に守りました。

保育専門学院というのは、保育園や福祉施設で働く保育を養成する二年課程の学校でしたが、専任は院長と教師二名、事務員一名、小遣いさんと寄宿舎の炊事婦各一名のささやかな学校でした。福祉の人材不足を埋めるために、道が税金を投入し、授業料は無料、寄宿舎には半数が入れて無料、この他に返済なしの奨学金まで出ていましたね。ですから私立の短大には行けないが向学心溢れる優秀な学生が全道から集まってきました。福祉の分野で働くん

だという気負いとしつかりした問題意識を持った学生だったのです。目的がはっきりしているわけですから、教育の内容も方法も教師自ら考えなければなりません。日本社会の構造や階層間格差、社会福祉の役割、保母の使命といった一貫した構成で、持てる限りの知識と力を動員して教育に当たりました。専門学校だからというので水準を下げたり手抜きはしない、それは全力投球でした。厳しく鍛えるというときに受ける学生達の抵抗は若かっただけに応えましたが、舎監をかねていたことが学生との交流を助けてくれました。寝食を共にし家庭の事情をいろいろ知ると心底から可愛いと思うようになりしました。私の力の入れ次第で良くも悪くもなるという思い入れもあつたと思います、ここで私は学生を可愛がる喜びを知ったのでした。

二、教師として

北海道立保育専門学院で教育の醍醐味を知る

子供二人の養育を背負っていたので、大学院進学をやめ生活が安定する「道立」に公務員資格で就職しまし

ました。調査票を作成し、どうやって話をしてもらうか、あとで報告書をどう書くか、手取り足取り教えました。対象者の生育歴から始まって、職業遍歴、家族の生活歴、現在の生活実態と意見などを聞くことによつて学生の視野は広がりを付けていきました。立派な報告書が書けることが分かったので、これを卒業論文集にまとめましたし、児童福祉司の資格が取れると事務の人が言うので道に提出しましたが、制度的に問題があるとのことで取得は短期間に終わりました。

ただ調査実習に当たつて心配したのはうら若い女子学生なので、危険な目に遭うのが心配で、二人組で帰宅時間厳守を申し渡したところ、夜しかない家庭では仕事が進まないというんですね。私はまだブルーカラーやスラム住民に恐れを抱いていたのですが、学生は「なあにうちの父さんと同じだよ。理由がなければ荒れくれたりしないよ」と言つて、夜道は棍棒を持って歩いていくわけです。考えてみれば学生の親は炭鉱夫や工員などブルーカラーの子供が確かに多い、自分の偏見に気づいて急に恥づかしくなりました。スラム

の調査の時も同じなんです。入り方が分からなくて困っていたところ、学生が「先生もう入れるよ」というのです。なんとセツルメントで子供らの爪を切つたり顔を洗つたり、宿題を手伝つたりしていたのですね。そんな手引きがあつて初めて部落のオサに逢うことが可能になったのです。なんと労働者階級の研究をやるなんて言っていないながら、対象に偏見を持っていたという恥づかしい人間だったんですよ、私は。「負うた子に教えられる」というのはこのことだったんですね。

その後この卒業生たちは全道各地に根をはり、定年までよく働いてくれました。学校自体は私学が増えるにしたがつて税金の無駄だというのが廃校になりましたが、私の教育の原点であり誇りでもあるこの学校と卒業生は、生涯の宝になりました。

「共に学ぶ」という経験もここでしました。将来厳しい福祉現場で働く人たちは、社会の実態を知つて貰う必要があります。社会調査実習（社会学の中でやる）で主としてブルーカラー労働者や貧困地域に暮らす人たちの戸別訪問をし

東京女子大学のゼミと卒業論文指導

古屋野正伍先生からの突然のお声掛かりで、東京女子大学の文理学部社会学科にやってきました。ずっと後になつて伺つたところでは、毎年学会で報告を聞いていたが研究がずつつな

がつているので、次はどう展開するのか興味を持っていて下さったようで、女子大でこういう指導をしてもえればということだったようです。一九六八年のことです。

当時の女子大では、英米文学科や日本文学科には女性の教授がおられました。社会学科では私が最初でした。東京女子大ということころは、誇り高い卒業生が事務に沢山残っていてうるさいところだったようです。東大出の男の先生がいくらでも来て下さる大学なのに、何で北大出の女なんか採用したのか不満であったと聞いています。しかし研究に脂がのつていて、古い本がほとんど読める環境が嬉しく、研究と新しい学生の教育に没頭していて気にもなりませんでした。

ここに勤務してみて、なんと警戒な教育環境かと驚きました。専任が七人もいて助手が二人、科目毎に非常勤講師が大勢来て下さいますし、開講数の多さには本当に驚きました。学生は一学年一〇〇人で、ゼミの平均はおよそ一二、三人でした。私は労働社会学担当でしたが、学生は近い関心ごとに各ゼミに所属してい

ました。この学生は何でもそつなくこなせるが、問題意識が希薄だという印象を受けました。

二年次には二五人ほどの入門ゼミが置かれており、ゼミ形式による発表と討論のし方を学びます。二年次の終わりに学部でのゼミの所属を決め、三年と四年次は同じゼミに所属して卒業論文を作成します。ですから二年次の終わりには卒業論文を誰に付けて書くか、およそのテーマが決まっていなければなりません。それで二年のゼミでは一年間に一〇冊の本を読んでレポートを提出させることにしました。本を読むのが苦手な学生にはつらかったようですが、卒論を前にして本をたくさん読む訓練が必要でしたし、引用文献のノートを取る訓練になるようにと考えました。本の選び方は興味関心に従って自由にしましたので、読む中でテーマを発見する学生もいました。やがて一〇冊レポートというノルマは学科全体のものになり、書かなければ単位が取れないようになりました。ゼミでテキストを使う本は、学生の意向も聞いて決めていました。まずはじめにどんなことに興味があるか一人一人に言わせませ

どんな話題でも受け入れていくとやがて最大公約数のテーマが浮かび上がってきますね。こちらが用意してある本のなかから候補をあげていって、賛成多数のものを決めます。時代の変化を反映して、はじめは労働関係の本でしたが、やがて家族に移り、やがて高齢者福祉へと関心が移っていき

ました。私は問題意識がない学生に対して、何でもいいから引っかけが持てる話題を引き出すことに苦心しました。しかし何かに興味を持たなければ研究などできません。話題を引き出すためには、こちらがあらかじめ豊富な種袋を用意しておかなければなりません。だから新聞・雑誌・週刊誌など話題性のあるものは何でも読んで置きました。ゼミは報告者がレジュメを配るのは当然ですが、討論を引き出すために論点を提示させ、さらに話題提供者も別に決めておきました。こうしておけば通夜ゼミを免れます。どんなとんちんかんな発言をしても、一言も発言しないよりはましという風潮と、とんちんかんでもそこから何か有用なものをつまみ出す教師の備えも必要になります。恥をかか

かかると次からしゃべらなくなりやすからね。発言者に恥をかかせない心配りが要りますね。

卒業論文のテーマを決めさせるときが一番大変です。特に問題意識がない学生には困り果ててしまいます。全く。二年次の間に何か考えておくように言っておいても駄目な人はいるものです。そんなときこちらからテーマを押しつけることは極力避けました。面接に当たって二、三テーマを書いて持つてこさせるんですけど、それで駄目でも何でもいから少しでも関心のあることを言わせるのです。押しつけたのでは自由な研究ができないし、新しい発見や展開が望めなくなるからです。いつまで待っても決められない学生とは、気長に何度も面接して対話をくり返すんですね。興味を持ちそうな話題は提供しますが、決めるのはあくまで本人なんです。学生が持つてくるテーマの中には研究論文にならないものもあります。そのテーマに関する文献の有無、実証の不可能なもの、大きすぎて絞り込みが必要なもの、決まるまで何回でも話し合うんですよ。気の長い作業です。

これが教師の仕事です。決まったらそのテーマに添った文献目録を提出させます。そして読んだ本の報告を受けます。これを読んだらという本があれば、自分の棚から引き抜いて貸し出します。だから研究室に本は置いておく必要がありませんね。

週に一度は報告をさせ、進捗状態と軌道修正を繰り返します。マンツーマンの付き合いを繰り返すうち、共同製作者のような人間関係が築かれますので、生涯忘れられぬ存在になってきます。ですから私は三〇年間の在籍中に指導した卒業生のテーマを学生の名とともに永久保存してあります。三〇〇人でした。

調査実習

骨の折れる授業ですが、学生にとって理論と現実をつき合わせる唯一の機会になりますから、必ず採り入りたいですね。東大では各ゼミごとに毎年テーマを決め、ゼミの教師が毎週二コマとって教えていました。実習に出る前は、立てた仮説を実証するための質問項目を立てさせ、質問を作った、並べ替えて調査票を完成させます。それから二人組にしてインタビューの練習です。対象の選定や許可を取るのには教師の仕事になります。宿泊する場合も教師です。まるで合宿さわりです。人と話が出来ない学生は出発前にパニックになつて、でもやらせるんです。おなかや歯が痛くなる学生もでてくる、でもやらせるんです。けどね、行ってみると面白い話を聞いたり思わぬ発見があつて、生き生きしてくるんですね、これが。ここまでの緊張関係をどう乗り切れるかなんですが、普段からどんな人間関係を築いているかがここで問われるんですね。実習中は宿で待機して臨機応変に指示を出しますし、夜には報告と質問を聞く会合を持ちます。くたくたに疲れるので、つくづく体力がないと出来ないなと思いますよ。

終われば集計とまとめをやって、各人に報告書を書かせ、編集してこの年度の大部の一冊が出来上がりま

集計をコンピュータでやるようになると、別途二・三時間の「情報処理」の授業を置き全員にとらせました。これだけの手間はかかりませんが、有り難いことに一人で卒論の調査が出来るようになりすね。全員が実証部分を入れてくるので、卒論は最低でも四〇〇字詰め一二〇枚というのが相場でした。製本しますから、金の背文字が載らないような薄いものは出せないです。

社会学にとって調査は有力な武器です。社会調査が担当できるといふ理由で研究者のポストを得た人もいますし、職場や地域に出ても問題解決の目的で自由に使ってくれると思っています。

学生との交流

学生との付き合いをさらに固める行事がゼミ合宿であり、飲み会です。四年次の合宿ではこれまで仕上げた論文の報告会をしますから、進んでいないと足がすくんで電車に乗れない学生も出てくるんだそうです。でもゼミ全員の中での進行状況の確認行事でもあるので全員出てきますね。面接が終わるとテニスの楽しみもあります。

女同士の気楽さもありますが、飲み会は折々に開いては元気を付けていました。が、相当なウワバミもいてびっくりです。いろいろな学生がいて本当に可愛いと思います。可愛がってあげば、どんなに厳しいことを要求したり叱ったりしても、ついてきてくれるものです。

ゼミの学生には、卒業後も「二月会新聞」と称する私家版を年賀状代わりに送って来ましたが、毎年二月に新卒業生を送り出す行事として旧卒業生も呼んで、激励会をやってきました。卒業後に縦のつながりを持たせ、相談や助け合いができることを期待しているわけですね。

小学生でもあるまいし、そこまでするのは甘やかしと言われるかもしれません。が、学生に気を配り可愛がることは教育の原点です。大学は研究機関だと勘違いしている教員が多くなりまして、役割の半分として教育を期待されているので、研究だけしたいなら研究所に就職するべきです。大学は年令のレベルは違っても人を育てるところに変わりはありません。それも研究者養成だけでなく学生が年々幼稚化している現在

ではなおのこと、教員はサービスマンだということに自覚しておく方がいいように思うのですがどうでしょうか。

大学院教育は自立した研究者をめざす

大学院については、東京女子大学には修士課程はあっても博士課程はまだ新設されてはいませんでした。随分長い間大学院を創るべきか逡巡していたのは、女子大学で教育しても果たして研究者としてのポストがあるか不安であったのと、外に出て他流試合をくりくり抜けてこそ一人前になれるという内部での一致した見解があったからです。しかし私立大学でどこもかしこも創設するようになってくると、ないことがハンデになってきたので修士課程だけは立ち上げました。今年になって博士課程も出来たと聞いております。

昔ながらの研究者養成機関と考えると、いかにも環境が悪すぎますが、より高い専門性を身につける教育機関だと考えると出来るだけの教育はして送り出そうということになります。従って一切甘やかしはせず、対等の研究者として扱いま

した。東女を出た学生の多くは他校の大学院に入って研究者になっていました。その後、博士課程設置要員として、関東学院大学に再就職しました。一年間は再就職しました。一年間は

東女の退職前だったので非常勤とし、専任として二年間勤務しました。この大学院に入ってきたのは社会人で、何らかの職業を持っていました。多かったのは医療関係者で、自営業者や専業主婦もいました。目標は研究者を目指しているのではなくて、一ランク上の職業上の地位に就くためでしたので、気は楽でした。

しかし論文は作成しなければならぬので指導を始めました。ですが、社会科学の基礎が全くない人たちだったので、職業人ゆえの欠席が多かったことです。文科省のねらいが高度な専門的職業人養成にあるからか、やたら定員を増やしたので空きが出来ないよう無理に入学させる結果となり、何年も博士号が取れない人が増えるだけとなりそうです。そうなるに厳しく鍛えたいとしても目標が違えば空振りになりますから、単位を出すだけの大学院教育になってしまうのでは無いでしょうか。

職業を持った社会人の再教育は気が楽ですが、対象がバラバラなので力の入れようがないという何とも奇妙な授業になってしまったのは残念でした。

社会学を学んで、どんな人間になってもらいたいか

四〇数年にわたる教員生活がふりかえると、自分自身が専門領域を拡大したことは感無量です。自分で変えたというよりも、学生の問題意識の変化に合わせてウイングを拡げていった結果の変遷でした。でも研究のテーマ自体は少しも変わっていませんが、労働社会学から家族社会学へ、さらに社会福祉学へという歩みは学生の興味関心に寄り添いたいと心がけた結果でした。四〇数年教壇に立つということ、教師自身の再教育を必要とします。社会学からはみ出る福祉学を担当するようになって、このままでは無理があると感じスウェーデンに一年間行ってきました。それによつて、労働についても家族についても時代の動きに即した新しい知見を得て豊富になりましたし、福祉の本場に学んだことは指導に当たって自信をつけることも

できました。省みれば資本主義社会の階級・階層研究を進めるなかで、つねに焦点を当ててきたのは貧困階層の生活問題でした。だからいままでの研究論文を「貧困研究の方法」としてまとめ、社会福祉学の博士号を得ることにしました。

長い人生を通じて私が求めてきたのは自立した人間であったように、学生に学んで欲しかったのは、「女性の自立であり、その基礎となる経済的自立を果たして貰いたい」ことでした。そのうえで、社会の歴史的な変化に目をとめ、現在自分のまわりで起きているさまざまな出来事に関心を持ち、つねにそれらを全体社会の中に位置づけて「構造的に理解する分析能力」を身につけて欲しいということでした。どんな環境にあっても新聞に目を通し、本を読むこと、正しい政治が行われるよう正義の羅針盤になることを言い続けてきました。果たしてその願いが叶えられているかどうかは、卒業生の生き方にかかっているといます。以上、恥ずかしながら私なりの勝手な教育実践をご披露しました。

平成二〇年に向けて
努力している事



70年卒 産業教育
坂本仁彦

自己紹介と近況

私はS四五年に大学紛争の為に全学合同では無く、学部別の卒業式を終えて道又ゼミを無事卒業致しました。

会 窓 同 部 学 教 育 学 大 道 北

(株)三越に就職し、日本橋本店勤務後商品本部、ソウル駐在所、仙台支店、そして平成一一年から二年間、札幌支店勤務となりました。当時、教育学部創部五〇周年にも巡り会いました。

当時町井教授のお取り計らいで(昔の教養部の)大講堂で「百貨店の歴史と今後、国民白書の流れと百貨店の消費トレンド」の演目で、大学生の皆様と交流する機会を持せて戴き、大変素晴らしい体験でした。

現在(平成二〇年)は来月(六月)に定年を迎える事となりました。

平成二〇年に向かつて!!

昨年位より、平成二〇年に向かつて取り組んでいる事が有りますのでご紹介致します。

それは私が在学四年間所属していた籃球部が創部七五周年を迎える事となり、その記念部誌の編集、発刊に携っている事なのです。

何故に七五周年なのか? それは八〇周年迄は待てない人達が多く居るからです。戦前活躍された先輩の皆様も多くの方が鬼籍に入られており、資料の散逸が心配されるからであります。

何故に私が編集責任者なのか? それは私の高校の籃球の指導者が当学部三年卒の坂本時夫氏であり、又、大学のコーチは北大医学部卒であり、高校の先輩でもある故太黒崇氏であった縁からであります。

当学部の卒業生一八名が籃球部を卒業しております。所属していた人は更に多くを数えると思います。

教育学部に体育学科が創設され、専攻された先輩の皆様は素晴らしいプレーヤーでした。戦後早々の昭和二四年より八年間、道内学生バスケットボールの試合に七三連勝した無敵の時

代の主力のメンバーです。

現在は、私立大学がゼミプロ化して圧倒に強くなり、高校野球の公立高校が文武両道で活躍している事を考えると少々残念な気がして

なりません。一番の課題は指導者不在です。大学の運動部は、専門的、科学的なトレーニングを必要としており、この体制が完備しなければ、私立大には勝てないと思えます。(但しボート部の様に国立大学が優秀な戦績を残している事もあり、指導体制が整っているならば、体力的には差異は有りません)

卒業以来、仲々母校の為に役立つ機会も少なく過ごして参りましたので、平成二〇年を期して北大籃球部の顕彰の為、母校の名誉の為に役立つ事が出来るのかなと思っております。

平成二〇年秋には、学内(クラーク会館)に於いて、記念式典を挙行したいと考えております。その折には、皆様方のご支援も色々お願い申し上げます。

教育学部卒業の籃球部の部員一覧
S二九年卒 加藤重明氏

教育学部卒業の籃球部の部員一覧
S二九年卒 加藤重明氏

S三〇年卒 平野信吉氏
S三一年 坂本時夫氏 故
佐藤修氏

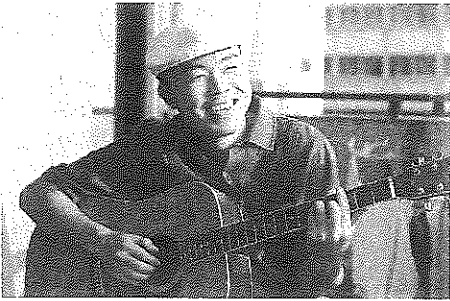
S三二年 高橋秋男氏
S三三年卒 伊藤隆氏 網
島隆氏

S三四年卒 大島貞氏
S三五年卒 坂本仁彦 S
S三六年卒 山本哲二氏
S三六年卒 新本直樹 H
三年卒 窪田善則氏

H八年卒 藤野真一郎氏
H一〇年卒 菅原文さん
H一一年卒 田村妙子さん
H一二年卒 細川美香さん
H一三年 高澤元氏 植田
理子さん

以上一八名。

☆ — ☆ —



97年卒 教育社会ゼミ
小西史明

教育学部のみなさん、お元気ですか。教育社会学の

小西です。同期だと産業教育の猿渡とか臨床心理の宛澤とか社会教育の阿部靖子なんかがいいます。何となく思い出していただけただけでしょうか。

お久しぶりなので、これまで何をしていたかなどをお知らせします。まずは卒業後、就職活動の結果むなしくプー太郎になってしまったので、しばらくは北大の掃除のアルバイトをしてました。廊下ですれ違う後輩には「何やってんすか」と言われ、掃除のおぼちゃんからは「大学出たんだからちゃんとして仕事しなよ」と言われ、ツライ日々でした。

学生のみなさん、机の中にゴミを置いていくのはやめましょうね。そんな日々を続けながら、何とか札幌の出版社に就職することができました。ここで道内の政治経済関係の記事を書いていたのですが、編集と営業が一体となった体制がツラかった。先方に「取材にうかがいたいののですが」とか言ってアポをとるので、最後には「ところで五万ぐらいで広告いかがですか、ウツシッシ」という話を持っていかねばならないのです。先輩

衆は「おたくの融雪機から火が出たそうじゃないですか!」とか言って、一〇〇万ぐらいボンと出させるといふ強者ばかりでした。

そんなこんなで札幌がイヤになり、沖繩の石垣島に渡りました。ここではリゾートホテル内の中華料理店で働きました。我が人生の中では心温まる時期で、休憩時間には真っ青に澄み渡る海を眺めながら釣りをしてました。鍋も振らせてもらえない下積み時期を経た後、コック長から「おまえ、この道でやってみな

いか」と言われた時にはうれしかったものです。しかし、そこから本土出身の先輩コックによるイジメが始まりました。いつもと同じレシビで作った杏仁豆腐を「これじゃ固いだろ!」とか言われ続け、逃げるように島を出ました。

ついにやってきました日本最南端の波照間島。ここではサトウキビ畑に灌漑用水路を設置する工事をしてました。とにかく金がかかったので、三か月契約でタコ部屋に放り込まれ、免許がないのにパワーショベルとダンプを使ってみました。男五人が六畳ぐらいのプレ

ハブで寝るといふキツイ環境なのですが、夜は酒飲んで歌って意外と楽しかった。鳥を離れる時は感慨深かつたなあ。

とか、書いているうちに長くなってしまったので、途中かなり省略していきなり近況を。今は東京に住んでますが、北海道のことは常に気にかけております。

「北大でピアガーデンだ」とつ。何でもっと早くやらん！」などと憤慨しております。ふだんは全国農業会議所というところで働いております。主に農地に関する仕事をしておりますが、そこで全国農業新聞という新聞を作っています。就農相談などもやっているのですが、新たに農業をやりたい人たちはどうぞ御利用ください。

この夏に札幌に行ったのですが、演研の先輩がお店を出して、楽しいひとときを過ごしました。北一七条のおなじみカネサピルの一階で「キッチン黒猫」というダイニングバーをやっています。狭い店ですが、行くと知った顔がいるかもよ。それと、ご存じの方も多いと思いますが、同期で教

失敗した話

育社会学の有本紀がプロのジャズピアニストになりました。札幌のバーやライブハウスで弾いています。小樽の音楽祭にも出たりしています。ホームページは「むこぶ」で検索してみてください。それではまた札幌で！（全国農業新聞編集部勤務）



坂本育美

06年卒 教育臨床

私は今年の春に北大を卒業しました。しかし、春からは今度文学部の方に科目履修生として通っていました。なぜかという、私は北大で教職免許を取得しようとして頑張っていたのですが、授業の単位について大きな勘違いをしていて、長い間それに気づかず、気づいたのは、卒業式の直前でした。結局、資格を申請できなかったのですが、今までの努力を考えるとあきらめしてしまうのはもったいなく思いますが、進路も未定だったので、

科目履修生となることに決めました。

卒業と同時に資格をもらえると信じて疑わなかった私は、資格申請できないとわかった時、ものすごくショックを受けました。そして泣きました。授業や実習での苦勞が水の泡になってしまったように思えたからです。

去年の夏に、何の疑問もなく教員採用試験を受験したことも、とても間が抜けているように感じました。

その時の周囲の反応は様々でしたが、「いいなー」と言われたことが印象に残っています。それは、北大にまだ通えることがうらやましいということでした。こんなまぬけなことをした私にとつて、その言葉は意外だったので、なんとなくわかるような気もしました。卒業後時間が経つにつれて、ますますその気持ちを理解するようになっていきます。しかし、前期が終わり、もし単位を取得できなければ、今度こそ北大とお別れです。寂しいですが、余計に半年通えただけでもちよつとラッキーだったかもしれない。そんな風に考える私はちよつと能天気な気もします。

HOKKAIDO UNIVERSITY

学生支援の「北海道大学カード」

《特典》

- 附属図書館の入館証
- 植物園の無料入園証
- 北大カード協力店の割引・優待
- 北大出版会書籍割引
- カード会社からの各種サービスなど

(詳細は申込書等をご覧ください。)

北大カードの利用額に応じた提携手数料がカード会社から還元されます。これを「学生支援資金」として、奨学金などの学生支援に活用しております。

お申込について

1. 専用申込書を下記あてご請求下さい。専用申込書をご送付いたします。
2. 「申込書」に所定事項記入・捺印いただき、投函下さい。
3. お申込から約1ヶ月後に、カード会社から配達記録郵便でご自宅あてお送りいたします。

申込書ご請求先

北海道大学連合同窓会事務局(北海道大学総務部広報課)
〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目
電話:011-706-2610, 2153 FAX:011-706-4870
E-mail:koukai@general.hokudai.ac.jp

UCカードのホームページ(<http://www2.uccard.co.jp/join/college/hokudai.html>) からも入会申込書を請求できます。(ページ下部の「資料請求」からお進み下さい。)

同窓会への便り 北大教育学研究科・ 学部社会連携・地 域貢献事業について



社会連携委員会委員長
柿崎 洋一

の存立のスタンダード(基準)として意識し始めたのは初めての時代ではなからうか。このことは、研究成果を学会や論文で公表し、教育の成果を卒業生に託すだけでは、大学の基本的なミッション(使命)を果たしたことにはならないという考えを大学人に迫るものとなっている。

同窓会 学部 教育学部 北海道大学

近年、大学の社会貢献に
関して、魅力ある大学づく
りや大学改革の観点から大
学のリソース(資源)の積
極的公開や活用、あるいは
大学の持つ教育・研究の知
的資源を「知識転移」
(knowledge transfer)と
せる仕組みの必要が多く語
られてきた。これまで、ど
ちらかといえば、内向きな
姿勢や視点をもちがちだっ
た日本の大学が、外部社会
にドアを開き交流・連携す
ることが基本的な前提とさ
ればじめていたのである。

加えて、二〇〇四年にス
タートした第三者認証評価
の動きは、大学評価におけ
る社会連携・地域貢献の具
体的な実践を問い始めてい
る。このように、にわか
に関心の度合いが高まった大
学の社会連携や地域貢献だ
が、大学人の中には期待や
抱負と共に、不安や困惑も
広がっている。評価に見合
う、社会連携・地域貢献と
は、一体全体何を指し、何
をすればよいのか。従来の
大学の教育、研究、大学の
管理運営といったキャンパ
ス内の自治の枠組みでは対
応できない外部社会とのあ
らたな関係構築をどのよう
に築くのか。こうした問い
が、多くの大学で語られる
ようになってきた。この場
合、外部社会との関係構築
には、幾つかの傾向が顕著
である。一つは、外部資金

導入と一体の形で産学官
連携の動向である。TLO、
リエゾンオフィス、知財セ
ンター、地域共同研究セン
ター、包括連携などのイン
ターフェースや協定づくり
がそれである。二つめは、
大学と地域社会に存在する
多様な機関・団体、運動と
の連携協力の広がりである。
自治体との協定、研究委託、
人材養成、研究的教育的貢
献の要請などである。どち
らかといえば、前者は理系
やリサーチ大学に強く見ら
れ、後者は、文系もしくは
地域密着型の大学に強く見
られる傾向である。世界的
水準の大学(World-class)、
あるいは世界的・地域密着
型水準(World regional class)
のいずれの大学像をめざす
のかによっても、この外部
社会との接続性は異なるの
が現実といえる。

さて、我が教育学研究科
は、この時代にあつて、何
をめざしているのだろうか、
何をすればよいのであろう
か。昨年行った事業を、以
下に列記してみると、自ず
とその方向性があらわれて
いるとはいえよう。

一つは調査研究を通じて
の地域との連携である。例
えば、士別市の若者支援の
地域ネットワーク構築のた
めの調査研究や、札幌市
の保育支援ネットワークの
形成に関する調査研究、
士幌町の子育て、健康、介
護、山村留学、士幌高校の
連携実践に関するネット
ワーク構築のための調査研
究などである。

二つめは、実践的な事業
プログラムの連携実践であ
る。特別支援教育と地域支
援・連携プログラムの展開
(就学前の子どもの場合、
学校内外の事例、新得町、
幕別町、足寄町、NPO法
人との連携)、士別市で
の公開講座の実施(若者問
題を調査に基づき多角的に
掘り下げるプログラム)、
札幌市での公開講座の実施
(寝たきり高齢者予防の筋
力トレーニング、若者支援
の学習プログラムの提供な
どがそれである)。

三つ目は、新たな連携型
実践の企画とその具体化で
ある。スクールリーダー・
カリキュラムリーダーの専
門職能高度化をめざす研修
プログラムの開発(北海道
教育庁との協力関係の中
で)や、大学職員セミナー
の企画とその具体化(専門
職大学院の動向をにらみながらも)などである。

四つ目は、新たな海外の
大学との連携共同による研
究や調査の追求である。英
国リーズ大学、韓国公州大
学校、ヘルシンキ大学など
との連携事業の進展は、そ
れまでのサハリン大学、
ポートランド州立大学など
との連携に加えての最近の
動向である。

このような動きをどのよ
うに統合し、研究科の方略
を考えていくのか。同窓会
の諸氏からのご助言、苦言、
提案を大いに期待したいと
思います。よろしくご協力
下さい。

同窓会事務局を 担当して



'80年度卒 教育学行政学セミ
齋藤 彰

昨年一〇月の総会で、長
年同窓会長を務めてこられ
た多米豊先生が勇退され、
新たに竹田正直先生が同窓
会長に就任されました。同
時に、本当に長きにわたつ
て幹事長として事務局を運

営してこられた小島忍さん
から、私齋藤が引き継ぐこ
とになりました。竹田新会
長に若い人をお願いしたい
と言われ、すでに若い世代
ではないと自覚していた私
にとつて、まさに晴天の霹
靂でした。一〇数年前から
同窓会の集まりに顔を出す
ようになりましたが、まさ
か今日このような重責を担
うことになるとは、当時
は夢にも思っていません
でした。

への移行では、当時男子学生が多くが法学部や経済学部を目指す中で、最小規模だからと教育学部を選びました。更に、ゼミでは行政学や教育法を学んだくせに、卒業後は民間に就職しました。結局人生の大きな岐路に立つと、とにかくみんなと逆に行こうというのが今日まで続いております。

しかし、ゼミでは山崎真秀先生、小出達夫先生の薫陶を受け、多くのすばらしい先輩や仲間に出まれ、あまりの居心地のよさについてい留年までしてしまいました。あの時代は今でも最も充実した時間を過ごしたと思っております。もちろん、大学を四年で卒業するのはイージーだという気持ちも本音としてありましたが、

「じゃあ、「いつたい、教育学部で何を学んだの?」と聞かれたら、胸を張ってこう答えます。「人生でもっとも大事な、人としての土台を得ました。これは一生の財産です。」と。

まず理解し愛することから始めようという姿勢が自然にあふれているのです。

社会に出てから、自らの利益ばかり追い求めるのが当たり前のように思っている人の多さに、ずっと辟易してきました。その理由に気がついたのは卒業して一五年もたった頃、同窓会に参加するようになってからです。決して出来の良い学生ではなかった私でも、先生方は憶えていてくれ、「お、元氣だったか!」と肩をたたいてくれ、また近況や夢までも生き生きと語ってくれました。そうか、お互いを尊重しあう所から始まる交流は、何て素晴らしいんだと実感しました。そして、教育学部ではそれが「あたり前」なのだと思いついたのです。この文化を受け継ぐことが出来た私は、とても幸せと思えます。

さて、同窓会活動に参加するようになってから、印象深い出来事がありました。一〇数年ぶりに連絡があった同じゼミの上田有宏君、いつか会おうねと言っていたのに半年後に彼の計報を受け取ることになるとうは。学生時代、私の実家から送ってくる米を目当てに

夜になるとアパートを訪ねてきて、とりあえず腹を満たしてから焼酎を酌み交わし、そのまま雑魚寝を何度もしました。歯ざしりがうるさくて目を覚ますと、まるでこの世の苦惱を一身で背負っているような寝顔をしていたことは忘れられません。

仕事で訪れた先で出会った、小樽商大教官の斐摩(ペイ・ジュン)さん。中国から留学したとの事でしたので、もしかやと思ってお聞きしたらやはり北大教育学部出身でした。さつそく仕事そっちのけで同窓会報への寄稿をお願いしたら快く引き受けてくださいました。彼女に原稿の添削を頼まれたときは、緊張しました。また、「先輩」とよばれ大変恐縮してしまいました。確かに卒業年次は私のほうが前なのですが。

昨年お客様縁で知り合った方から、娘さんが北大教育学部を目指し頑張っているという話を聞き、実は私は卒業生ですと話したら憧れの目で見られてしまい赤面の至りでした。その娘さんは今年見事に合格し入学しました。ご本人親御さんはもちろん、私も

でもうれしい思いをしました。また、今年の学部での学位記授与式・祝賀会に参加して、若い卒業生の皆さんの希望にあふれた姿にふれて、また気持ちを新たにしました。もうそろそろ、大切な文化を次の世代に伝承するべき年代に差し掛かってきたなあと感じております。

この文章は、今年度版の教育学部案内に掲載された拙文に加筆・修正したものです。

特別掲載

昨年の同窓会出欠はがきおよび同窓会費などの振込み時に、近況報告していただいた方々の声をご紹介します。なお、ほぼ一年前の「近況」を原文そのまま掲載いたしますので、ご了承ください(順不同、敬称略)。

- 第二の職場も退職し、のんびりやっています。 小西 功(63年卒) 札幌市北区
○六月に尾瀬に行き、鎖やロープを傳つてのアップ・ダウンも含めて、約二五キ

口歩いて来ました。よく歩いてくれた足に感謝していただきます。来月は奥大井に行く予定です。皆様のご健康を心からお祈りいたします。

○愛知県職員として三〇年、障害者、児童福祉分野に職を得て、「たより」の記事を参考に、あるいは札幌の香りとして楽しみにしています。 勝尾 裕和(75年卒) 愛知県春日井市

○地域の「九条の会」、平和展開催など、およばずながら叫んでいます。札幌学院大の非常勤講師は三月で終わります。 高橋 守(59年卒) 白老郡白老町

○北大教育学部の今日的意義とは何ですか? 小林 文男(56年卒) 広島県広島市

す。同窓会のますますのご発展を祈念致します。 小野塚 恒男(78年卒) 新潟県新潟市

○軟式野球部のOB・OG会の会長と監督をして、各種大会・合宿・遠征等で学生たちと楽しい汗を流しています。 近田 光路(57年卒) 札幌市手稲区

○法人化後の教育学部研究科・学部の新しい姿についていろいろお聞きしたいと思います。 北守 昭(76年修了) 札幌市北区

○「年月をいかでわが身を送りけむ、昨日の人も今日はなき世に」とおり、確実に定命が近づいているこの身の実感です。「人は邂逅し開眼す」というのが多くの人々に支えられ、生か

北海道大学教養学部同窓会

されているこの身を有難く思っております。

常本 勇 (55年卒) 札幌市北区

○まだ現役でやらせてもらっています。

忍 博次 (54年卒) 江別市

○四月から札幌学院大学で働いています。昨年病気を患って右上下肢マヒの身体障害者になりました。

伊藤 則博 (62年卒) 札幌市厚別区

○「大学における教育と研究」(学士会会報No844)

逸見レポート拝見しました。オペラ「タンホイザー」ほかDVD視聴。スポーツクラブ日参。大根・枝豆の野菜仕事。お酒は毎日一合以内。病院通いは七週に一回。お陰様で無事消光中。

黒川 昭和 (55年卒) 札幌市

○毎日リハビリが続いております。お陰様で、道新の連載の「ことばの徒然草」も三年続いています。めげずに頑張ります。

藤谷 榮也 (54年卒) 札幌市厚別区

○毎週木曜日は、わが札幌シルバリー男声合唱団の練習日と重なり、残念ですが欠席いたします。

唐津 愈 (54年卒) 札幌市中央区

○一二年間続けた町内会役員(副会長+会長)を辞任。室蘭ジュニアオーケストラ団長を辞任。肩の荷が下りる。室蘭市民オーケストラ活動は今年で二年目。今では最年長になったが、若い人達の中で、パワーを貰っている。老人大学のハーモニカグループの指導で、一四年ぶりにピアノにさわり、C調の楽譜づくりで楽しんでます。

小林 賢 (55年卒) 登別市

○珍しいことに、生まれて初めて河西外科病院に五週間ほど入院しまして、リハビリ中ですが、元気です。ご盛会を祈念しています。

森 二三男 (58年卒) 札幌市中央区

○ご案内有難うございました。毎年同窓会出席は楽しみにしておりますが、今年は運悪く、仕事先の「産業保健推進センター」の全

国研究協議会開催にぶつかり、出席のため欠席せざるを得なくなりまして。とても残念です。私事、北大HP退院一年になり、とても元気に仕事を続けております。ご盛会を祈念しております。

井上 蓉子 (62年卒) 岩見沢市

○作業療法士の背番号一号で、たくさんの仕事に当たって来ました。精神科の病院で、一生懸命「リハ」をしていました。現在、小学生を「淋しいから学校に行かせない」という退院後の母親をどうすることもできません。医療が社会での片手落ちなのに直面しています。大変です。

鈴木 明子 (55年卒) 愛知県名古屋

○旭川から、稚内高校に異動し、現在三年生の担任です。学力問題について深く考えさせられながら、一人ひとりと向き合っています。

徳長 誠一 (98年卒) 札幌市内

○ゆつたりと自然体の日々を過ごしております。ご盛会を願っています。

千早 坦 (56年修了) 札幌市中央区

○外地赴任中ですー母 松永 篤知 (88年卒) 東京都東久留米市

○平成一五年三月、第二の職を辞して、現在は完全年金生活。小さな家庭菜園で有機無農薬の野菜づくりに挑戦しています。

大居 健二 (57年卒) 札幌市厚別区

○NHK、民放など放送界の仕事すべてを終え、パリで画家としての道を歩き始めました。現在はパリと東京半々の暮らしです。個展は一月に二度目を東京八重洲で開きます。また、武蔵大学客員教授として映像アーカイブ論を教えています。

武田 光弘 (60年卒) 東京都杉並区

○四〇年ぶりに故郷札幌に戻りました。北大構内を散策して、同窓会だよりで読んでいた逸見先生よろしく、目と耳を働かせて、小鳥や樹木を味わいました。

塩谷 滝衣 (61年卒) 札幌市中央区

○今年は愛知県で愛知地球博が開催され、私も一三回足を運びました。

大島 淳司 (85年卒) 愛知県一宮市

○ビジネスもレクリエーションも順調です。先日はマカオで!

中條 憲也 (56年卒) 千葉県船橋市

○当日は少年柔道(清田体育館)の指導者が私一人しかおらず、どうしても不在にできません。皆様によるしくお伝えください。

葛岡 誠一 (67年卒) 札幌市清田区

○病氣療養中ですが、主人はリハビリなどに励んでおります。皆様にお会いできる日を楽しみにしております。

古瀬 卓男 (57年卒) 札幌市中央区

○漢方処方はこちら一年ほど固定され加減(生薬)しておらず、完成されたものと思われま。悩みは家事労働で十分な養生ができないことです。

三浦 正敏 (71年卒) 岩手県岩手郡岩手町

○国立大学も独立行政法人化され、より経営的側面が重視されると聞きます。鈴木学部長の「同窓会だより」での所感によれば教育学部も「中小企業を中心とした地域企業」との連携重視をうたっておられます。小生の仕事とも関連深く、その前進に期待しています。

国吉 昌晴 (66年卒) 東京都西東京市

○「同窓会だより」楽しく読ませていただきました。今回は都合がつかず欠席いたしますが、今後も宜しくお願いいたします。

堺 美和 (89年卒) 福岡県福岡市

○浪人生活三年目。市の防犯推進委員として居住区の防犯パトロールの傍ら、援農(中学時代)で覚えた畑づくりを生かし、少しばかり野菜づくりに精を出しています。歌のほうは少し覚えがなくなりましたが、お陰様で体のほうは元氣いっぱいです。

大國 拓哉 (55年卒) 埼玉県さいたま市

○二〇〇三年コープさっぽろ定年退職、二〇〇五年箱

根牧場退職、九月から札幌学院大学生協関連(有)札幌学院大サービス勤務中。
三宅 勲(69年卒) 北広島市

○札幌市立中学校を定年退職後、札幌山の手高校にて英語、教育相談、今年は留学生に日本語を教えております。
内山 滋子(56年卒) 札幌市中央区

○二〇〇七年問題の当事者である我々団塊の世代の第二の人生のスタートとなります。同期を誘って、同窓会出席も楽しみかな?と思っております。
坂本 仁彦(70年卒) 東京都世田谷区

○今のところ元気のため、現役で働いております。
白佐 俊憲(60年卒) 札幌市厚別区

○産業教育ゼミを卒業以来三〇年余りが経ちました。卒業後札幌を訪れたのは五、六回ですが、いつも北大に立ち寄ります。皆様のご健勝とご活躍を祈念致しております。
牛島 康明(74年卒) 千葉県千葉市

○混沌とする社会の中で、食事療法をやりながら何とか元気で。
木藤 茂男(53年卒) 札幌市南区

○私は山形県出身ですが、北大教育学部で、戦前の山形における教労運動の歴史を知り、また卒業後は城戸幡太郎先生に大変お世話になりました。私は現在、千葉県の高校で教員(世界史)をやっていますが、教育の反動化に抗し、「日の丸・君が代」強制反対、教育基本法改悪反対の運動に取り組んでいます(私自身も研修問題で裁判闘争中です)。
渡部 秀清(72年卒) 東京都杉並区

○二〇〇五年三月末で会社を辞め、現在は、フリーのサッカーライターに転身しました。福岡を拠点に、活動中です。地元チームのアーユエイ戦で、札幌へも行くことが増えました。
URL: http://www.2002world.com/ 中倉 一志(80年卒) 福岡県福岡市

○高一・中一・小四の子供がいます。卒業後、道のケースワーカー二年の後ずっと専業主婦でしたが、意を決

して社会復帰中。二〇年ほど遅れましたが、夢に向かって再スタートします。
山根 昌代(87年卒) 札幌市中央区

○同窓会の皆様のご多幸を祈念致しております。
本間 実(55年卒) 旭川市

○小生、二年前に北海道新聞社を定年退職し、現在、関連会社(道新オフセット(株))で社長をしております。不出来な学生でしたが、学部時代のことは懐かしいです。
下総 裕輔(65年卒) 札幌市南区

○体調悪しく、残念。
中村 襄(56年卒) 札幌市白石区

○生涯スポーツⅡ生涯健康とばかり、いまだにバレーボールの尻を追っています。短大退職後も学外コーチとして学生指導に当たっています(秋季大学リーグ函館遠征)。来年こそ総会出席を。
花田 徹夫(56年卒) 札幌市東区

○同封の同窓会日より、五年前の卒業生として感慨

深く読みました。
伊藤 博(55年修了) 札幌市東区

○ご連絡ありがとうございます。お陰さまで元気に過ごしております。
伊藤 静代(64年卒) 札幌市北区

○現在病氣療養中で休職中です。来年に復職できるかもしれません。
阿部 剛康(91年卒) 釧路市

○この数年欠席しています。来年は一〇月一日不可欠要件にて小樽へ行きます。少し延ばして同窓会にも顔を出したいと思えます。
織田 光之(55年卒) 埼玉県さいたま市

○同窓会日より、懐かしく拝読(皆さんのご活躍の様子、大学も変化していることなど)。卒業後五〇年近く、元気で故郷にて小・中・高時代の同窓会とか、寺院の世話など、暇なく過ごしております。
鈴木 尚(56年卒) 京都府京都市

ボール・リーグのため函館に出向いています。ご盛会を祈念致します。
吉田 敏雄(56年卒) 札幌市北区

○ご案内ありがとうございます。ご盛会でありました。ご盛会でありましたように!
中尾 祥子(61年卒) 札幌市西区

○都合で出席いたしません。皆さんによりしくお伝えください。
高山 武志(55年卒) 札幌市白石区

○民間企業に就職し、一年前に東京へ転出しました。多忙な毎日ですが、北大での素晴らしい日々を思い出し、頑張っています。
三田村 麻美(03年卒) 東京都板橋区

○いつもお世話いただきありがとうございます。ご盛会です。
前田 憲(64年卒) 名寄市

堀 康子(02年卒) 石川県金沢市

○卒業して約半世紀、発達段階論の最終章をどう生きるか、模索しながらの日々です。
長峯 憲二(60年卒) 札幌市中央区

○ラジオから地上波テレビへ、さらに衛星放送へ。大変革の時代を約四〇年、放送の送り手として過ごしました。そして定年後の今、放送、新聞を含めて、ジャーナリズムの衰退に心を痛めています。何がメディアを変えるのか。
橋爪 幸正(61年卒) 埼玉県さいたま市

○元気でおります。
村田 洋(64年卒) 東京都世田谷区

○一昨年、三六年間勤務した札幌学院大学を定年退職、現在悠々自適の生活です。
安栄 鉄男(61年卒) 北海道広島市

○昨年久しぶりに北大構内の芝生で昼寝して参りました。学生時代に帰った気分でした。今後ともよろしくお願いたします。

及川 満 (54年卒) 千葉県松戸市

○前役員の皆様ご苦勞様でした。新役員の皆様のご尽力に期待します。同窓会に出席するよう努めます。

織田 光之 (55年卒) 埼玉県さいたま市

○新しい仕事に来年から。「夢・未来塾」(仮称)で、四〇年後、世界のリーダーになれるような教育を高浜市内でNPOで起こします。私は英語でしゃべるようにいわれています。新しいことは面白いですよ。

鈴木 明子 (55年卒) 愛知県高浜市

○敏正先生、学部長就任おめでとうございます。北の大地ともすつかりご無沙汰の昨今、たよりが届くたび、魂が熱くよみがえるおもいです。

和田 昇 (83年卒) 大阪府寝屋川市

○いつもお世話になっております。同窓会だより楽しく読ませてもらっています。

大居 健二 (57年卒) 札幌市厚別区

〈同窓会会則改正案〉

1、会則の一部改正について

①、第3条;

現行「本会は、事務局を会長の指定した場所に置く。」

改正案「本会は、事務局を幹事長の住所に置く。」

*郵便振替口座の代表者名変更のため。

②、第5条; 総会は、全会員をもって構成し、次の事項を議決する。

現行「(5) その他会長が会の運営上重要と認める事項」

改正案「(5) 会則の改正
(6) その他会長が会の運営上重要と認める事項」

③、第9条3項;

現行「幹事会は、幹事の過半数をもって成立し……」

改正案「幹事会は、構成員の過半数をもって成立し……」

④、付則;

追加「本会は事務局を幹事長の住所に置くが、幹事長は下記会員に委嘱する。

(記) 第28期卒 齋藤 彰 〒063-0037 札幌市西区西野7条2-1-2

*郵便振替口座の代表者名変更のため。

追加「本会則は平成18年10月19日より施行する。

以上

〈お詫びとお願い〉

昨年の総会にて、幹事長が長年務められた小島忍さんから齋藤彰に引継ぎとなりました。しかし、郵便局の口座の代表者は現在も小島さんになっております。これは今回の総会で同窓会則を変更しないと、代表者名の変更は難しいという郵便局の見解のためです。したがって、しばらくは、事務実務担当は齋藤ですが、口座の代表者は小島さんのままという状態が続きますが、ご了承をお願いいたします。(齋藤 彰)

〈図書幹旋のお知らせ〉

①平成一七年度版「同窓会会員名簿」三、〇〇〇円 *今春発行の最新版です!
②学部創設五〇周年記念「写真でつづる教育学部五〇年」二、〇〇〇円 *貴重な写真、懐かしの写真が満載。在庫最少! いずれも送料込みです。ご希望の方は総会の時、もしくは事務局齋藤(〇九〇一三七七三七八二四)まで直接お申し込みください!

会務報告

期 日	会 務 事 項
H17. 10. 20	同窓会総会 31名参加。
H17. 10. 末	同窓会総会参加者へ集合写真とお礼状を郵送。
H17. 12. 9	役員・幹事・特別会員あてリテラ・ポプリー郵送。
H17. 12. 29	役員改選のお知らせを幹事各位に郵送。
H18. 2. 27	平成17年度版 同窓会会員名簿発行。
H18. 3. 13	役員・幹事・特別会員あてリテラ・ポプリー郵送。
H18. 3. 24	北大卒業式。学部の学位記授与式・祝賀会に竹田会長と齋藤が出席。学年幹事委嘱。同窓会としてビールを贈りました。
H18. 4. 24	役員・幹事・特別会員あてリテラ・ポプリー郵送。
H18. 5. 30	北大連合同窓会合同会議。齋藤が出席。
H18. 6. 20	北大広報課より基金設立協力の依頼あり、打ち合わせ。
H18. 6. 26	幹事会開催。
H18. 8. 13	小林 文男会員 (第4期、昭和31年卒) 弔電。
H18. 8. 16	役員・幹事・特別会員あてリテラ・ポプリー郵送。

会計報告 (H17.10.20~H18.9.20)

収入の部		支出の部	
前期繰越	189,113	総会時支払 (H17)	121,650
総会時収入 (H17)	195,000	会費作成発送費 (H17)	333,507
会費等収入 (料金相殺)	445,611	通信費	53,360
		雑費・消耗品費	18,914
		慶弔費	24,690
		小 計	552,121
		※次期繰越	277,603
合 計	829,724	合 計	829,724

※繰越内訳	
郵便振替残	82,703
銀行預金	194,900
計	277,603